



東北応援チャリティ公演

大地のうた⑥ / 産土〜つながって争せの生まれる里

3月6日(日) 14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●1500円 (前売当日共)

出演●阿部一成(篠笛、愛媛、元鼓童)、竹繁文章(津軽三味線、吉野川市)、高橋宏徳(剣舞)、桧獅子舞保存会(獅子舞、鳴門市)、鴨島鳳翔太鼓(和太鼓、吉野川市)、亀本美砂(インド古典舞踊)、武田仁美(ソプラノ)、栗田美佐(ピアノ)

主催●東北応援・プロジェクトあい(村澤☎090・1171・7375)

防災ビデオ上映会

東松島市からのメッセージ

～震災を語り継ぎ未来を創造するために

3月11日(金) 11時～11時45分

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

主催●北島町立図書館・創世ホール(☎088・698・1100)

■震災直後から東松島市図書館が市民の体験談や被災写真等を収集した資料を仙台放送がまとめた映像記録集を上映します。

3.11映画祭in徳島2016★遠藤ミチロウ監督作品

「お母さん、いい加減あなたの顔は忘れてしまいました」上映会

3月11日(金) 19時～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

作品●「お母さん、いい加減あなたの顔は忘れてしまいました」(2015年、日本 102分) 出演=遠藤ミチロウ、ザ・スターリン246、大友良英、和合亮一、オーケストラFUKUSHIMA!、竹原ピストルほか 監督=遠藤ミチロウ

問●3.11映画祭in徳島運営事務局(チャーリーブラウン・神農☎088・679・9776)
■自らの還暦ツアーのさなかに起こった東日本大震災。故郷福島は津波と原発災害に襲われた。遠藤ミチロウは、大友良英、詩人の和合亮一と共にプロジェクトFUKUSHIMA!を立ち上げた。そして、これまで距離を置いていた故郷と否応なく対峙することになった■ライブの旅と行く先々での人々との対話を描くロード・ドキュメンタリー。演奏ミチロウ堂々の監督作品がここに登場■当映画祭は、全国有志の自主上映会をつなぎ、社会へのアクションとする活動です。毎年3月11日前後に、東京のアーツ千代田3331をメイン会場に全国のサテライト会場で同時開催します■今年、当作品がラインアップされていたため、徳島では縁のある北島町創世ホールを会場とし、同時に遠藤氏の畏友・地引雄一氏講演会の連帯イベントとして開催。

第22回AJET徳島英語ミュージカル

ヘラクレス：アワ・ヒーロー

～ギリシャ神話のヒーローが徳島に！～

3月12日(土) 15時～(開場14時半)

会場●3階多目的ホール 入場無料

主催・問合せ●徳島県国際交流協会(☎088・656・3308)

地引雄一◎講演会

東京ロッカーズからプロジェクトFUKUSHIMA!へ

国産同時代音楽37年間の目撃証言

3月20日(日) 14時半～(開場14時)

会場●3階多目的ホール 入場無料

講師●地引雄一(写真家、文筆家、プロデューサー 66歳)

主催●北島町立図書館・創世ホール(☎088・698・1100)

■かつて福島県の山村を訪れ家族写真を撮影していた青年が、パンク～ニューウェイヴ音楽シーンに深く関わり、時を経て被災地支援で再び福島と向き合うようになった■その足跡を貴重写真と対話でたどる試み■恒例の創世ホール講演会に、我が国のパンク～ニューウェイヴ音楽に黎明期から深く関わってきた地引雄一氏が登場。東京ロッカーズから大友良英・遠藤ミチロウ・坂本龍一らと被災地支援に取り組むプロジェクト FUKUSHIMA!に至る活動を語り、熱気あふれる国産同時代音楽シーンから日本の行く末を見つめる。聞き手=小西昌幸

(▼写真下左=リザード、1979 地引雄一撮影 ▼写真下右=地引雄一氏近影 青木一成撮影)

笑福亭たま・旭堂南湖二人会⑨

3月27日(日) 13時半～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売/大学生・一般1500円、小・中・高校生1000円(当日各500円増)

出演●笑福亭たま(上方落語家)、旭堂南湖(上方講師)

演目●落語「ちしゃ医者」ほか1席(お楽しみ)、講談「赤穂義士銘々伝より 神崎与五郎の詫び証文」ほか1席(お楽しみ)

主催●たま・南湖二人会実行委員会(☎088・698・1100)

■毎度おなじみ上方演芸界を背負う2人のプリンス笑福亭たまと旭堂南湖(きょくどう・なんこ)、9回目の二人会。今回も超満員必至!健康増進・抱腹絶倒! お見逃しなく。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

探録◎中相作講演会

永遠の十三～海野十三と江戸川乱歩②

2014年5月17日(日) ●北島町立図書館2階ハイビジョン・シアター

●創世ホール・アーカイブスの一環として、2014年に海野十三(うんの・じゅうざ)の会主催で開催した中相作(なか・しょうさく)氏講演会「永遠の十三～海野十三と江戸川乱歩」の講演探録を連載でお届けしています。(文中一部敬称略/探録文責=小西昌幸)

■ですから、(森下雨村[もりした・うそん]編集長は)『新青年』に探偵小説を掲載するようになります。探偵小説を特集した別冊も出しました。別冊というのは、つまり『新青年』は月刊誌ですから1年に12号出るんですけど、レギュラー以外の号を出す。それが別冊です。しかも1冊全部が翻訳探偵小説の特集になっている、といったような探偵小説に重点を置いた編集方針を打ち出しまして、それがまた読者や寄稿家の大変な評判を呼びました。それで、翻訳探偵小説は面白いものだな、と思う読者がだんだん増えていったわけです。

■大正9年創刊の『新青年』が、そうやって探偵小説の牙城になっていったところで、初めて日本人作家、それも、ほかのジャンルの作家がたまたま探偵小説を書いたのではなく、探偵小説の専門作家が『新青年』にデビューします。アメリカの探偵作家、エドガー・アラン・ポーの名前をもじってペンネームにした江戸川乱歩という作家、どこの誰ともわからないまったく無名の新人作家が、いきなり「二銭銅貨」という短編を発表して、それがまた大変面白い小説でした。海外からもたらされた探偵小説を日本の風土に溶け込ませた作品として、乱歩のデビュー作は探偵小説ファンの大変な喝采を集めました。黒岩涙香の翻案作品から始まって翻訳探偵小説が受け入れられていったあと、いよいよ日本人作家による創作の時代が始まります。それが大正12年のことでした。

■乱歩と十三はどちらも早稲田大学を卒業したんですけど、十三は乱歩が卒業した時期に入学して、のちに理工学部に進んでいます。つまり時代的にもすれ違いですし、乱歩は経済、十三は理系と、専門分野も違っていました。十三は理系の本も出して、大正14年には『米国製真空管一般特性表』という、とても素人には理解できないような専門書を本名の佐野昌一名義で出版したりしています。そのころ乱歩は、といいますと、当時は大阪に住んでいたんですけど、いよいよ作家専業で東京でやって行こうと決意して、家族とともに東京に転宅しました。一方の十三は、初めてフィクションに手を染めることになりました。

■十三はたぶん昔から文章を書くのが好きで、色々なものを書いていたと思うんですけど、いよいよフィクションに手を染めたのが大正15年でした。それでそのあと、昭和3年になってようやく『新青年』に初登場します。乱歩がデビューした『新青年』に、十三もまた名前を連ねました。初登場作品は探偵小説で、「電気風呂の怪死事件」という題名からもわかるとおり、電気ショック効果のあるお風呂での事件が描かれています。ちょっとエロティックなところもあり、グロテスクなところもあるというような作品でした。

■その翌年、乱歩は「蜘蛛男」で『講談倶楽部』に初登場しました。ここでまた、日本の探偵小説の流れが大きく変わるようになります。

乱歩は「二銭銅貨」を発表したあとも、短編小説を発表してゆきました。厳密には探偵小説とは呼べないかな、というような作品も少なくないんですけども、一応、探偵小説として書かれ、それが探偵小説として読まれて、乱歩は探偵作家としての名声を獲得していきます。

■なにしろ乱歩には、下積みの時代がありませんでした。デビューした時点ですでに第一人者でした。日本で初めてプロの探偵作家となって、デビュー作で大変な好評を得て、一身に期待を集めて、日本初の探偵小説専門作家として次々に作品を発表してゆきました。ところが、探偵小説というのは一作ごとにトリックが必要で、同じようなもの・似たようなものを、手を変え品を変えて書いていくわけにはまいりません。ですから、たちまちのうちにトリックが尽きてしまいます。

■もう書くことがない、どうしようかという時に乱歩が選んだのが、昭和4年「蜘蛛男」で『講談倶楽部』に初登場、ということでした。講談社が発行していた『講談倶楽部』は、『新青年』なんかとは比べものにならないぐらい、発行部数が多くて、原稿料も高い雑誌でした。それで乱歩は、もうヤケになってしまって、自分の思うような小説は書けないんだけど、『講談倶楽部』からオファーがあるんだから、注文がある以上はとにかく小説を書いて原稿料を稼いでやれと、そんなヤケな気持ちになって書いたのが「蜘蛛男」でした。これも一応、探偵小説ではあるんですけど、タイトルからも想像できるとおり、かなり扇情的な内容なんですね。

■この作品は1年ぐらい連載されたんですけども、蜘蛛男と呼ばれる犯罪者が登場してきます。これが大変残酷な犯罪者で、女性をさらって、残忍な手法で殺害して、という犯罪を繰り返します。それがまた読者の評判を呼ぶわけですね。つまり、探偵小説本来の謎解きの面白さとはちょっと違う面白さを、乱歩は読者に提供したわけです。もちろん謎解きもあるんですけど、蜘蛛男が美しい女性をどうやって殺すか、なぶりものにするか、あるいはどうやってさうか、かどわかすか、そういう謎解きとは関係のないシーンが読者にアピールしました。要するにエログロです。昭和初年にはエログロ・ナンセンスという社会風潮が一般的であったとされており、まさにエログロという当時の社会風潮に共鳴するような作品を、乱歩は長編小説として次々発表してゆきます。

『蜘蛛男』の後は、『黄金仮面』ですとか、『魔術師』ですとか、要するに一人の犯罪者が若い女性をかどわかして殺害する、といったエロティックな題材がグロテスクに描かれるような小説を、乱歩は量産しました。それがまた大変よく受けました。そうなりますとほかの作家も、そっちの方向に流れるわけですね。読者に受けるとなると、雑誌の編集者も作家に対して、乱歩みたいなものを書いてくれと、そうしたら売れるからと、そういう風に作品を依頼するようになります。つまり読者や編集者が望むような方向へ、だんだん探偵小説自体が進んでゆく、エログロに軸足を移してゆくということになりました。

■そうすると、探偵小説イコール・エログロである、というふうな固定観念が読者の側に定着してゆきます。探偵小説を読まない人はどうかというと、むしろ読む人よりも強烈にそういう印象を抱いていったのではないかと思います。つまり探偵小説を読まない人でも

新聞を読みますから、新聞を読むと雑誌の広告が出ているんですね。講談社の雑誌の広告に大変いかかわしい謳(うた)い文句とか、ちょっと目を背けてしまうような挿絵があって、それが乱歩作品の宣伝であるとわかったら、「乱歩ってこんなか」ということになります。乱歩作品は読んだことないけれども、乱歩というのは何か悪いこと・いかかわしいこと・いやらしいことを書いているなど、とても教育上よろしくない作家だなど、そういうふうな認識がだんだん広まって行って、探偵小説イコール・エログロであり、乱歩はそのエログロの第一人者、トップ・ランナーであるという印象が強くなってしまいました。大正時代に比べると、探偵小説はレベルの低い小説、低劣な読み物だというふうな認識が一般に定着いたします。

■昭和初年にデビューした海野十三も、だんだんエログロの印象が深まってゆく探偵文壇で、探偵小説を色々書いていったわけですが、昭和8年になりますと、年譜には「太平洋雷撃戦隊」で『少年倶楽部』に初登場、とあります。子ども向けの作品は昔から書いていたけれども、『少年倶楽部』に登場したのはこれが初めてです。『少年倶楽部』も講談社の雑誌で、やはり大変な発行部数を誇っており、日本全国津々浦々の少年が、月一回の発行を心待ちにしている人気雑誌に、十三は「太平洋雷撃戦隊」でデビューしました。これはどんな作品であったかということ、完全に軍事科学小説です。……………(次号に続く)……………

ご支援ください 地引雄一氏講演会

■2016年3月20日(日)14時半から、北島町立図書館・創世ホールは写真家でプロデューサーの地引雄一氏講演会「東京ロッカーズからプロジェクトFUKUSHIMA!へ」を開催します(入場無料)。

■私は、1981年に実物の地引雄一さんとお会いしました。遠藤ミチロウ氏もセットです。お二人とはそれ以来の交流です。2013年に地元紙の夕刊コラムでそのときのことを書いたことがあるので、当該文章を再録します。

■【(略)遠藤ミチロウ氏は福島県二本松市出身だ。出会いは32年前にもなる。その昔法政大学学生会館ホールのパク系の催しが面白くて、上京時に足を運ぶことがあった。/1981年5月に出掛けたときに地引雄一さん(写真家、東京ロッカーズ関係者)と立ち話をしていたら「徳島って変なミニコミやっている人がいるんだよな」という声が聞こえた。声の主は「それは私のことですよ」と言ったら地引氏が「遠藤ミチロウ君だよ」と紹介してくれた。それが初対面だった。(略)縁というのは不思議なもので、この十数年遠藤ミチロウ氏の徳島でのコンサートのお世話をさせていただいている。(以下略)】(「徳島新聞」2013年2月6日付夕刊コラム「ぞめき/福島の人・遠藤ミチロウ」、執筆=小西昌幸)

■講演会企画を進めている内、県内のレンタルビデオ業界の方々から被災地支援の3.11映画祭という取り組みと、その関連で遠藤氏のドキュメント映画上映会企画のご相談を受け、北島町立図書館2階ハイビジョン・シアターで実現することになりました【3月11日(金)19時～、無料】。

■地引氏の講演会にあわせて、図書館カウンター前では、ドッキリ・レコード、スターリン「トラッシュ」、終末処理場、フリクション、フュー、アウシュヴィッツ、INU、東京ロッカーズ、じゃがたらなどの珍しいレコードを展示しています。すべて私(小西)の個人コレクションです。ぜひご覧になってください。

■3・20当日は、西村明(元スーパーミルク、滋賀)、工藤冬里(マヘル・シャルル・ハシュ・バズ、愛媛)、坂本葉子(元ほぶらきんマネージャー、大阪府)、加藤・デヴィッド・ホプキンス(日本バンク自主レーベル研究家、天理大准教授)などの方々の来館情報も届いています。私は2月に千葉県市原市の地引さんのご実家に足を運び、直接打ち合わせてきました。大きな収穫がありました。講演会は氏のお申し出により、小西との対話形式で進行します。多数、ご参集下さい。(文責=小西昌幸)

上方講談◎旭堂南湖(きょくどう・なんこ)寄席スペシャル……………天に竹林寺、地に少林寺、落語界に笑福亭たま、講談界に旭堂南湖あり!

笑福亭たま◎旭堂南湖◆二人会

【落語&講談】◆落語ちしや医者 ほか一席(お楽しみ) ◆講談赤穂義士銘々伝より 神崎与五郎の詫び証文 ほか一席



▼笑福亭たま 一九七五年一月六日大阪府貝塚市生まれ。本名辻俊介。血液型B型★一九九八年京都大学経済学部卒業後、笑福亭福笑に入門する。芸名の「たま」は実家がピリヤード場を経営していること由来す。都大出身者として注目を集める実力派■ここ数年、近畿圏ローカルのテレビやラジオのレギュラー番組出演の他、民法やNHKの番組に出演するなど、活躍中■平成二十三年度「なにわ芸術祭 新進落語家」◆旭堂南湖(きょくどう・なんこ) 一九七三年八月三十一日兵庫県宝塚市生まれ。大阪芸術大学大学院卒。九九年三代目旭堂南陵に入門、八番目の弟子となる■「上方講談ニューウェーブ」「上方講談界のプリンス」の異名の継承、探偵講談の復活、新作講談の創造に意欲的に取り組む。二〇一〇年、文化庁芸術祭新人賞受賞▼嘶家(なしか)連で頻繁に阿波踊りに参加する等徳島と縁が深い●一〇年春、歩き通路で四国八十八か所参りを敢入場料●大学生・一般 前売一五〇〇円(当日二〇〇〇円)……………小・中・高校生 前売一〇〇〇円(当日一五〇〇円)……………電話予約

二〇一六年三月二十七日(日)午後一時半開演(二時開場) ◆北島町立図書館・創世ホール◎二階ハイビジョン・

問合せ●北島町立図書館・創世ホール TEL 〇八八・六九八・二一〇〇 会場所在地●徳島県板野郡北島町新喜来字南古田九一(北島町役場となり) 主催●たま・南湖二人会実行委員会 共催●北